

# コロナ禍に想う

⑥

東京・大阪・神奈川など大都市圏にとどまらない新型コロナウイルス感染拡大。しかし、経済活動を優先する政府は全国一律の緊急事態宣言の再発令には否定的ながら、芸術・文化活動への支援には消極的だ。連載第6回は、映画監督の金聖雄さんに書いてもらった(小見出し等は編集部)。

## 金聖雄(映画監督)

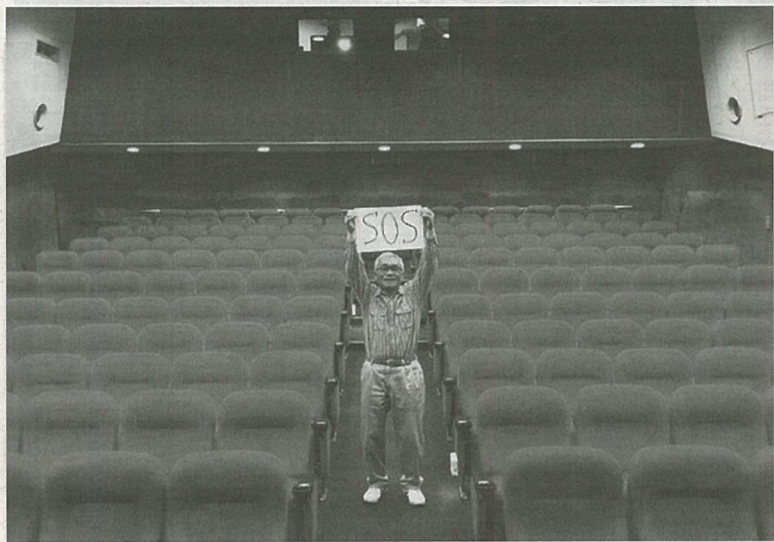
主人公である、袴田事件の袴田ひで子さんと狭山事件の石川早智子さんが参加するので、二人を中心にインタビューなどの撮影を予定していた。しかし二人はテレビ電話での参加となった。私自身またコロナに関しての危機感はなく、正直、過剰反応だと思ったが主催者の判断は素晴らしい。と、いまさら思う。その後あつという間に世界に感染が広がり、説明するまでもなく、いまにいたる。ひで子さんと早智子さん、二人が揃うシーンの撮影はすべて中止、4月に予定していた番組の放送も2回の延期を余儀なくされた。

## 映画撮影が中断し、ミニシアターは存続の危機へ

誰も予想しなかった「コロナ禍」。日本では映画、演劇、音楽、一般に芸術・文化と呼ばれる営みは真っ先に不要とされた。「本当

にそうだろうか」「自分はどすればいんだろう」先が見えず正解がないか、あらためて自分の生き

▼「つぶれてたまるか」と4月17日から館独自のクラウドファンディングへの協力をよびかけた浜松市民映画館「シネマイーラ」館主の榎本雅之さん



一時閉館に追い込まれた。なかでもギリギリで運営してきたミニシアターは存続

## 逆境に立ち向かう映画人たちの行動は一筋の光だ

しかしそんな逆境に立ち向かう行動は一筋の光だ。「ミニシアターを救え」を合言葉に、無名だった頃、映画館に育てられた監督や俳優、スタッフなど映画人たちがいち早く立ち上がった。署名中心の「SAVE the CINEMA」とクラウドファンディング「ミニシアター・エイド基金」だ。最終的に署名は9万筆を超え、クラウドファンディングは開始3日で目標額の1億円を突破、最終的には3億3000万円をあげ、関係者を勇気づけた。

## 作り手、映画館、観客のアクションが道しるべに

ミニシアターを一つのシンボルとして作り手、映画館、観客がつながり、おこしたこの小さなアクションは、これからの道しるべになるように思う。「経済優先ではない良質な芸術・文化、教育、医療、政治、地域、人間関係...」本

必要なもの、ただお金を払って手に入れるものではなく、それがつながり、おたがいにアクションをおこして、支え合うことではないか、守ることができないのだと思う。

## 芸術・文化は必要なんだ

「映画の作り手の立場から」

の危機に陥った。本来ならばこういう時こそ国のリーダー、政治が問われるのだが、「森友加計、桜を見る会」など数えきれない問題にたいしてまったく責任を放棄してきた状態をみれば、「コロナ禍」を乗り切る策を講じる

それは想像をはるかにこえて「アベノマスク」「Go To」の文化大臣はこうのべ

た。「アーティストは今、生きるために必要不可欠な存在だ」そして零細企業・自営業者向けの緊急支援枠

日本では3月27日、文化庁の長官が「芸術文化の灯を消してはなりません」と経済支援には何一つ言及せず

**ゲノム操作と人権**  
新たな優生学の時代を迎えて

天笠 啓祐 著  
A5判 125頁  
定価 1400円+税

科学技術の発展は人間の遺伝情報さえも操る。それがゲノム編集。制御できなくなった科学技術の差別性と闇を問い続ける著者の渾身の警世の書

**解放出版社の本**

FAX 06-6581-8552  
TEL 06-6581-8542